

先輩がくれた「カオナシ」

福島県天栄村立天栄中学校

三年 大平 水 菜

私には、とても尊敬している先輩がいる。その先輩は、昨年まで同じ特設陸上・駅伝部に所属していた、いつも笑顔で明るく、チームのムードメーカーのような存在だった。いつも私を励まし、周りにいる人達を笑顔にしてくれる。レースになると、その姿は、まるで別人のように変わり、表情は頼もしく、とても格好いい。そんな先輩が、私は大好きだった。

先輩達が卒業し、私は三年生になった。今までは、先輩達がひっぱってきてくれた特設陸上・駅伝部も、今度は私達がひっぱる番となった。今までの練習では、苦しいときがあっても、いつも先輩達が励ましてくれていた。そのおかげで乗り越えることができた練習は、数えきれないほどたくさんある。さらに、みんなで練習をする楽しさや、達成感も感じることでできていた。しかし、今までの私は、自分のことで精一杯だったため、チームのみんなのことまで考える余裕はなかった。そのため、後輩達を励ますことができないか、不安だった。

特に最初は、慣れていないことが多く、失敗することもたくさんあった。チーム全体での荷物を忘れてしまったり、情報が部員全員に伝わらなかつたりと、今まで先輩達があたり前のように行っていたこ

とが、こんなにも難しいことだとは思っていないかった。

慣れない中でも、チームの中心となって必死に練習をしてきたことで、私は共通八百メートルで県大会出場を決めることができた。練習は、朝練だけでなく、放課後練も行うようになった。練習内容は、県大会で四位入賞し、東北大会出場ができるよう、さらに強度が上がっていった。しかし、苦しくて、心が折れそうになっても、もう、励ましてくれる先輩はいない。私の気持ちは、少しずつ落ちこんでいった。

そんな練習が続く中、県大会はどんどん近づいてくる。そして、県大会前日。私の中では、緊張や不安でいっぱいだった。宿泊の準備を進めていると、妹が帰ってくる時間になった。外から、自転車を止める音が聞こえてきた。妹が帰ってきたと思った、次の瞬間

「こんばんは。」

と、聞き慣れた爽やかな挨拶が聞こえてきた。大好きな先輩が、私の家に来てくれたのだ。先輩は、手に持った紙袋から、次々ともものを取り始めた。まず最初にとり出したものは、レース用のくつしただ。そのくつしたは、先輩が、私のことを考えて買ってきてくれたものだそう。次に、先輩が実際に使っていて、良いタイムが出たというサプリメント。最後に、良いタイムが出たというサプリメント。最後に手紙だ。私は、手紙をあつと読むことにし、先輩とたくさん話しをした。先輩は、一度話し出すと、もう止まらず、その日もずっと話し続けていた。先輩の変化らない姿を見ていると、うれしくなった。先輩は、高校での話や、その日の出来事など、おもしろい話をたくさん聞かせてくれた。さらに、先輩が県大会に出場したときの気持ちや、アドバイスまで話してくれた。落ちこんでいたはずの私の気持ちは、

どどんやる気で満ちていった。最後に、「頑張つてね!」

と言って、先輩は自転車をこぎ出した。

先輩が帰った後、私は先輩が書いてくれた手紙を読んだ。以前と変わらない、格好いい言葉で、私を励まし、応援してくれた。手紙の右下には、「カオナシ」のお守りがついていた。お守りの下には、「私だと思ってもってろっ!」

と書いてあった。笑顔と涙が、同時にあふれこの「カオナシ」に、私はどれだけ背中を押してもらったのだろうか。先輩のおかげで、今までの練習を乗り越えてきた自分に、自信を持つことができた。

いよいよ県大会当日。アップを終えた私は、「カオナシ」をリュックにつけて招集所に向かった。もちろん緊張はしていたが、この日も「カオナシ」が私の背中を押してくれた。結果は三位。レースでは、自己ベストを更新し、東北大会出場を決めることができた。

今でも私は、「カオナシ」をリュックにつけて、いつも持ち歩いている。そして、レース直前になると、笑顔でこちらを向いている「カオナシ」に背中を押してもらっている。最初はできなかったことも、最近はだんだんと慣れてきて、できることが増えた。今まではできなかった声出しも、その一つである。仲間と練習を乗り越える楽しさを感じられるようになった。

明るくて、いつも笑顔で、頼もしくて、いつも私を助けてくれる憧れの先輩。今まで、特設陸上・駅伝部の柱として、チームをひっぱってきてくれた大好きな先輩。そんな先輩を目指して、私はこれからも走り続ける。